特集・横浜の国際性❷

国際都市〝横浜〟をどのように受けつぐか

外岡　勲

一――横浜は国際的な〝まち〟だろうか
二――日本あるいは江戸の代行としての横浜
三――港と町との跛行経済
四――資本の工業化への乗りおくれ
五――横浜の国際性の低下と日本の国際依存度の上昇
六――開港遺産――異文化間交流経験
七――国際媒体都市機能の発揮
八――都市間の国際交流
九――結びに代えて

一――横浜は、国際的な〝まち〟だろうか

横浜は国際都市といわれる。そして、まさしくそのように思われている。

それならば、いうところの「国際」とは簡単にいってどういうことだろうか。

ひとつには日本人以外の他の国の人々との間になんらかの交流や接触があることだろう。確かに横浜には二万人に及ぶ外国人が住んでいるし、何よりも港があって外国船も数多く出入りしている。

しかし、これだけで国際性があるとか、国際都市といえるのだろうか。二万人の外国人といえば、いかにも多数のようにみえる。けれども総人口の二七七万人に比べたらどうなのだろうか。

また外国人が住んでいるだけで果たして国際性あり、といえるのだろうか。

おそらく、国際性があるというためには、これらの外国人が横浜に住みつくだけでなく、なんらかの形でそれぞれの母国たる諸外国と交渉をもち、程度の差こそあれ日本の動きに影響を及ぼす活動をしていることが必要だろう。

その意味では往時、横浜に住んでいたいわゆる外国人は、今は東京の港区方面に移り住んでしまったことになる。ちなみにその辺りを歩かれれば「西洋人」が家族づれで、乳母車をひいて買物などをしている風景にお目にかかるだろう。

これはその昔、横浜の山手で見かけた風景であって、東京では日常的にはなっていない風俗であった。それだけ横浜から西洋人が姿を消したことになる。

船の方はどうだろうか。今日、貨物の入船・出船は巨大な量にのぼる。貨物の往来は毎日頻繁である。戦後、港は巨大化し、物流機能は肥大化している。昨年あたりは七兆円の輸出入があった。しかし、これだけの巨大な量の貨物を扱いながら、外国為替の量は非常に少ない。取

引は東京で行われている。

また貨物船の出入りはあっても、客船はばったりといっていいくらい来なくなった。

ちぢめていえば、横浜は昔の方が国際的なカラーが濃かったのである。昔というのは開港した時から太平洋戦争の開戦前後くらいまでになろうか。

二――日本あるいは江戸の代行としての横浜

自由貿易の許可に関する幕府布告の出た安政六年六月二十八日、今は貿易記念日となっている一二〇年前のこの日、横浜は長崎や函館とともに日本の貿易の窓口として世界に開かれた。

「日本の」ということは幕府権力の所在地である江戸に代わって開港されたのである。当時の列強諸国は、できるだけ江戸に近い場所を要求し、幕府は政治的、軍事的理由からできるだけ江戸から離れた土地を主張して、いわば妥協の結果、神奈川ではなく横浜にきまった経緯についてはよく知られているとおりである。ここは、陸路は東海道を横にそれて野毛の山を越えるか、また海路は神奈川台から船便の位置にあり、隔離された立地条件にあった。このことは、一二〇年後の今日に至るまで、都市形成のさまざまな面で影響を及ぼしている。

幕府の布告文によれば、横浜の港で「商人ども勝手に商売遂ぐべき候う」というわけで自由に貿易ができるようになった。ちなみにまだ攘夷だの開国だのと斬った張ったをやっている最中で、新選組の結成はその四年後のことになる。

こうして横浜には各地から商人が集まり、開港の翌年の井伊大老が暗殺された万延元年には一五〇の店が軒をならべた。また、外国の商人も英米独仏など合わせて八〇の商館が開かれている。横浜絵などをみても内外の商店・住居などの甍の波が描かれ、当時の殷賑を伝えている。後年、横浜の亀善とうたわれた原善三郎も、この翌年の文久元年に武州から生糸を横浜へ出荷している。

このように当時の横浜という土地は、国家的政策によってにわかに外国との窓口にさせられ、国際的な橋頭堡となった。しかし、本来の横浜のもつ必然的発展によって国際的性格を帯びたのではなくて、国家の必然と判断によって国際都市となる運命に遭遇したのである。

内外の商人たちは、幕府布告のとおりそれぞれ勝手に商売をやるため港の周辺に蝟集した。元手のない出稼ぎや一旗組もおびただしい人数にのぼったであろう。この新開の港町は、いろいろな風体やさまざまの方言が行き交い、伝統や因習にこだわらない一種独特の雰囲気を醸し出していたに違いない。

いずれにしても、人々は貿易を通して、また貿易に連なる仕事で生活をすることになった。彼らは欧米人との接触によって利益を得たり、また生計の手段を得たが、その過程で国際的なさまざまの交流があり、この異文化間交流によって相互に影響し合った。例えば西洋の文物として、ビール醸造、写真館、牛鍋、石鹸製造など枚挙にいとまのないほどのものが横浜で試みられている。また、英語なども横浜の庶民は、生活的に習得して使った。「ハマチドリ」(How much dollar?)などはその例である。

三――港と町との跛行経済

このように貿易を通じての横浜の国際的性格は、年月の経過とともに一応の定着をみることになる。そして、横浜の業界は、全国の業界を左右する実力を有するようになった。代表的な貿易取扱品の生糸などは、巨額の自己資金を擁して産地に金融をし、全国に君臨した。

横浜は貿易を通じて国際化し、港を通じて国際化してきた。はじめ、日本の国際化は横浜を媒介として進展した。日本貿易の進展と横浜港の進展は、相似形の発展をした。そして「横浜

港の貿易」は、当然のことながら「横浜の貿易」であった。すなわち、「日本の貿易」をいくらか縮尺して反映しているのが「横浜港の貿易」であり、それがそのままイコールに「横浜の貿易」であったのである。横浜港と横浜経済は、しっかりと密着していたのである。あまりうまい譬ではないが「日本の貿易」が兄であるとすれば、「横浜港」と「横浜」の貿易は双子の弟のようなもので、三人仲良く手をつないで歩いていた。

この限りでは、隆々と伸展する日本の経済に連れ添う形で推移してきた横浜貿易であったけれども、いつの間にか双子のパートナーである「横浜港貿易」と背丈が合わなくなってきた。パートナーの「港」貿易君の方が、なりこそ一回り小さいが兄貴の「日本貿易」君と似た体つきなのに、「横浜貿易」君の方は生まれつき丈夫だったのが段々と育ちが悪くなり、手をつないで仲良く歩こうにも、その手が「港」君にとどかなくなってしまったのだ。

つまり、日本が富国強兵策を進めるなかで徐々に重化学工業化し、全体の輸出商品構造においても産業の近代化を反映するにつれて、横浜港貿易の姿も同様の推移を示したが、これに比し横浜経済はいつの間にか日本経済の相と乖離した現象を示すに至った。

四――資本の工業化への乗りおくれ
――触媒としての横浜

こうした変化とともに横浜市の国際的性格も相対的に薄くなってきた。すなわち、日本の開国とほとんど時を同じくして、横浜は日本の国際化を独占し、そして他の都市が開港した後においても、なお人的な且つ物的な国際交流の拠点としての地位は、神戸と並んで優勢であった。取引機能も国際貿易都市にふさわしく機能していたのである。

しかし、横浜のプロパーの資本は商業資本に留まり、ついに産業資本に転化発展することがなかった。日本の資本主義が一八九〇年代に商業資本から産業資本に転化した一方、横浜では蓄積した富を工業に振り向けることが少なく、このため経済発展が停滞した。横浜の国際都市としての開花もそこに留まり、例えば同じく遅れて工業国になったドイツのハンブルクのように貿易・金融・工業まで含めて、それ自身が完結している国際都市に成長し得なかった。

いわば、横浜はそれ自身はさして変化を受けず、他の物質の化合を促進する触媒のような都市であった。確かに、欧米からの先進の文物で横浜を通らないものはないし、人的な面でも外国からの来訪客はほとんど横浜の土を踏んでいる。しかし、これらの文物や、人的往来が横浜の土にそれほど根を張っていない。かりに発芽しても枝を張るまでには至らない。従って花も開かない。

よく横浜を称して人々は、日本の「玄関口」という。いうところの意味合は別かもしれないが、玄関とはいい得て妙である。玄関では人は落ち着いて話をしない。その家にとって大事な話や品物の受け渡しは、玄関を通って奥で行われるのが普通である。

もともと国家権力の判断のままに、首都の代替として、また軍事的理由などから日本の中枢部から不即不離の場所に立地したという淵源があるのだから「触媒」であろうと玄関口であろうと、それは織り込み済みなのだ、という考え方もあろう。そして、そのままことが進めばそれなりに横浜は無事安泰であったかもしれない。

五――横浜の国際性の低下と日本の国際依存度の上昇

開港後半世紀を経た一九一〇年に生糸の輸出が中国を抜き、世界第一位を記録したあたりから、横浜のいわゆる国際性は相対的に低下して

くる。理由としては前記の事情のほか、大震災や第二次大戦それに航空機輸送の発達などが挙げられる。本稿は、衰退の理由を述べるのが本旨ではないので歴史的経過は省略するが、横浜の国際性が往時に比し低下しつつある時、日本国自身が国際化への要請に迫られてきた。

大方がつとに認識しているように第二次大戦後、日本は面積がわずか三七万平方キロの島国に一億二千万人が生存しなければならなくなった。しかも居住に適する平地は一七%に過ぎないし、その上、天然資源にも恵まれず、ほとんどすべての原材料を海外に仰がねばならない。その代金支払いのためには加工貿易で稼がねばならない。こうした図式は戦前でも同じだったが、今日では南北問題がからみ、貿易は日本国民の生存にとって不可欠になった。

とくに近年は、エネルギーはもとより食糧の自給率が低下するにつれ、われわれの日常生活の物的手段は、すこし注意を向ければ外国産の原材料・製品によって占められていることがわかる。例えばエネルギーの海外依存度は、米国の二〇%、西独の五七%に比べて日本は九二%と大幅に高く、木材はそれぞれ二%、二五%、六一%、小麦は△七六%、三%、九六%といずれも先進工業国の中で、日本はずばぬけて諸外国の原材料にたよっていることがわかる。

いいかえると、一億二千万の日本人の一人ひとりが、米国民や西独国民等よりも深く世界経済の枠の中にしっかりと組み込まれている。今や日本一国だけでは明日からの生存も心もとないのが現状である。相互依存時代の尖端を切って歩かざるを得ないのが日本である。つまり、日本は世界の中で最も高い国際性を要求されるようになった。けだし当然であろう。

六――開港遺産――異文化間交流経験の活用

国全体の国際依存度が上昇する一方で個々の日本人の国際性は伸びが鈍いし、むしろ横ばい気味である。日本人の非国際性のよってきた理由などは、ひと頃はやっていた日本人論に委ねるとして、今後は孫や子の代はもちろん、その後も世界の中でしか生きていけないと覚悟をきめねばなるまい。

そう覚悟をきめたうえで横浜市は何をしたらよいだろうか。つまり、国際性が高度に要求されている日本の中の横浜市をどう位置づけたらよいか。

よきにつけ、悪しきにつけ横浜は一二〇年の歴史がある。第三の開国ともいわれる時代に際会し、この歴史的経験を活用し、あるいは逆手にとって新国際化時代に対応する方途を探ってはどうか。

安政六年の開国後、日本は市場の開放を求められ、一次産品の生糸・茶等を輸出し、工業原材料を輸入して徐々に資本主義国に成長していく。この際、横浜は日本の前衛の役割を果たした。

一九四五年の太平洋戦争終結によるいわば第二の開国後、日本は軍国主義の解体が要求され、民主主義国家に転生していく。この際、横浜は占領軍の最初の拠点となり、広大な接収地の提供等の緩衝機能を果たした。

第一及び第二の開国の先鋒はいずれも横浜がつとめた。過去二回のこの衝撃的な経験は、無形ではあるかもしれないが、まさしく横浜の歴史であり一種の遺産として残して活用すべきものである。

現今、相互依存が進展する世界的状況にあって、対外閉鎖性の開放が真剣に論議され、国際性の高い国への脱皮――第三の開国へと歩みを進めるにあたり、われわれは手許にある過去の貴重な経験に学ぶべきであると思う。横浜の体験した対外接触の、つまりカルチュアーショック等を含めて国際交流経験の歴史的事実を掘り起こし、活性化し、また学問的に体系化し、そしてこれらの成果を国内の都市や団体等に提供するような先導的な国際都市として位置づけて

みてはどうか。

加えて、国内情報を世界に伝達することも含めて横浜を日本と外国との情報媒介機能を持つユニークな都市に変えていくことが、横浜のいわゆるアイデンティティの強調につながると思われる。

七――国際媒体都市機能の発揮

横浜は確かに開港時から関東大震災あたりまでが華やかに金銀珠玉がちりばめられた時期であるし、その後は震災と大戦で衰退気味になった。いずれにしてもこの横浜で一二〇年間にわたり営々と外国人と渡り合っての商いにいそしんできた経験の蓄積は消えていない。埋没したかに見みえるこういう広義の国際交流経験を発掘し、現代の光をあて蘇生させよう。

横浜としては、文明開化のハードの遺産、例えば建築物などの修復や保全だけでなく、ソフトとでもいうべき対外経験から生み出された国際交流の潜在ノウハウを賦活し、とかく、国際関係に弱いといわれる日本の都市や団体に情報として伝えてはどうか。

これが今後、ますます厳しさの予測される新国際化時代に入っていくに際し、要請される横浜の役割ではないだろうか。

まず横浜の対外交渉史を体系化して、なんらかの法則を導き出す。そして、これから現代にも通用する国際交流の手段ないし方法論を構成し、他の主体が行う国際交流の促進に活用させる。

次に、横浜はもともと新開地だったから排他的でなく、何ものにもこだわらない開放性があることに着目しよう。港というのはその属性として開かれた性格をもつ。この特質を生かして、横浜をしてメディア機能――海外情報を摂取して国内に提供し、また国内情報を積極的に海外に放つような――を発揮させてはどうか。

当面は、横浜をアジア環太平洋圏に開かれた日本の臍として位置づける。すなわち、アジア諸国等と日本間の情報・物流の収集拡散のコア都市を志向するわけである。その具体的方途は今後の研究にまつことにして、例えば、アジア環太平洋の地域研究の中心としてもよいし、また横浜に相互輸出入拡大のため、各国産品展示場を併設した商談促進センターを設け、商務官や駐在員を誘致すること等は一つの方法であろう。

八――都市間の国際交流

ここで国際交流とか外交とかいうことにすこし触れてみよう。

従来は、外国との交渉とか交際とかいうと、中央政府の行うこと、という考え方が強かった。外交主権は、責任ある政府に属するというのは当然だとしても、外交とか国際交流というものがなにも政府だけに属するものでないことは、これまた当然とみてよいだろう。一般に価値といわれるものが、人によりまた団体により多元化している今日では、政府という一個の団体のきめた一元的な基準によって数多の個人や団体の対外行動を律するのは不可能である。もし、それを実施しようとしたらはなはだしい専制国家という謗を免れまい。

もちろん、今日でも中央政府が国際関係を律する主要な当事者である。ことに国民としての権利・義務に関することについては中央政府間の交渉分野であろう。

けれども現代のように非権力的な分野での国内活動やあるいは対外交流が増大し、また前世紀に比べ交通・通信の手段が格段に発達している状況では、政府間交流と等置的に民間交流とか市民交流また都市間交流というようなつき合いが欠かせないものになってくる。

一つには社会の各領域で行われている国際交流がある。例えば労働、宗教、経済、教育等の各領域で活動している団体は、それぞれに構成

員に対してなんらかの権利・義務関係をもち、一定の行動準則を示し精力的に活動しているものが多い。また、これらの団体の行っている国際交流は、中央政府の行ういわゆる外交とは別の次元であるが、一定の利益を追求して相互に交流をしているわけである。

また国の中の地域（例えば都市）は、それぞれに歴史や伝統に支えられた異なる文化や経済等の背景を持っており、ユニークさを持っている。従って外国とのつき合い方も自ら異なってくるわけで、それぞれが異なる相に従って交流を進めてゆけば、まさしく画一的でなく、多様な層の厚い国際交流を実現していくことになる。

このように一国には、都市も含めて種々の目的を追求する団体があって、国という包括的な団体と重なり合ったり、団体同志で相接したりしている。こうした団体群が各自、他国のさまざまな団体と国際交流を積極的に進めていく、いわば多元的に諸外国との交流の輪を幾重にも拡げていくのは、ますます相互依存関係の深まりをみせている地球社会にとって望ましいことだし、何よりも平和の維持や促進につながる。

この種の多元的交流が深化すればするほど、包括団体たる国家間の、いわば一元的交流の生み出す利害得失の緊張を和らげることになる。例えば日中両国の国交回復の進行状況をみても、民間の交流からはじまって、その厚みを増しながら政府間の正常な交流に及んでいったのは周知の通りである。

九――結びに代えて

横浜市は、国という団体によって包摂された団体の一つであるとともに、地域の種々の団体とさまざまなかかわりをもつ団体である。そしてこの国では古い時期からいろいろな国と交渉があった都市であって、さきにも触れたように国際交流を体験することの激しかった都市である。

今や横浜固有の蓄積を起動エネルギーに転化し、活力に満ちた国際交流主体としての横浜市の創造のために着実な歩みを進めるときと思われる。

〈経済局主幹〉